

Cats Narrow Road

Taro Izumi
Emi Otaguro
Tam Ochiai
Sayako Kishimoto
Ken Sasaki
Teppei Soutome
Hideyuki Nakayama
+Taichi Sunayama

中山英之十砂山太一
五月女哲平
佐々木健
岸本清子
落合多武
大田黒衣美
泉太郎

ねこの
ほそ道

2023. 2. 25 sat.—5. 21 sun.



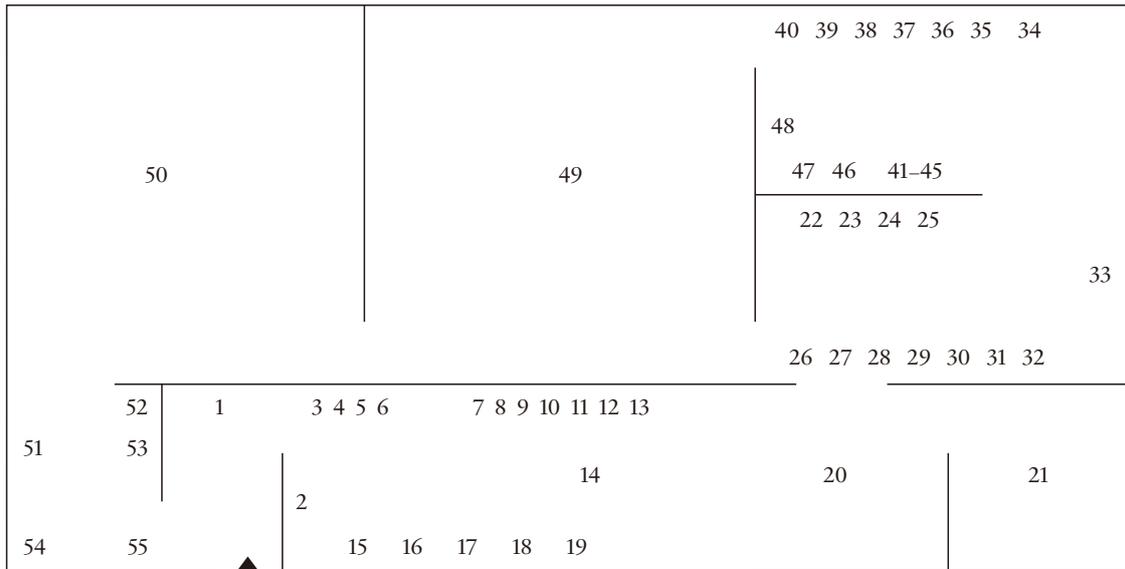
Toyota
Municipal
Museum
of Art
豊田市美術館

ねこのほそ道

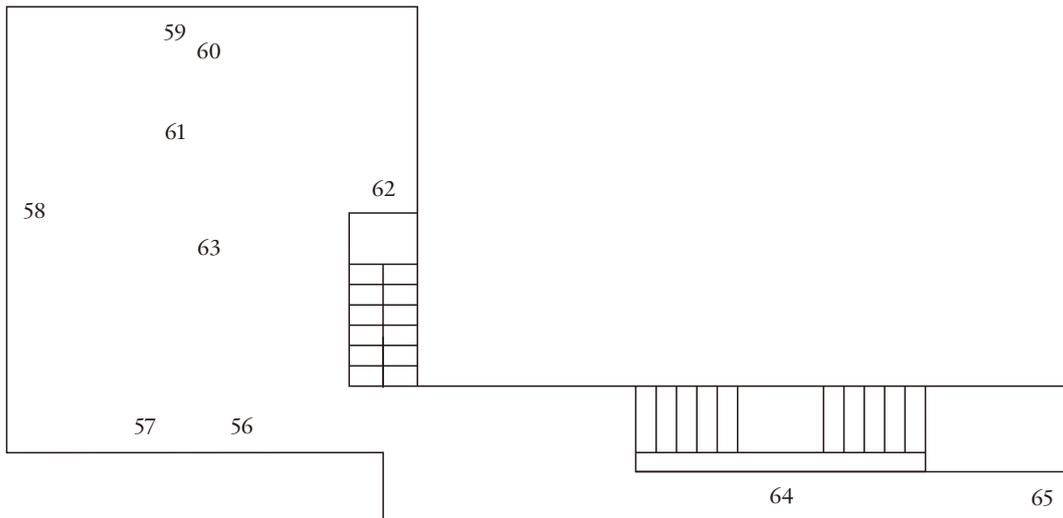
ねこは、長い時間のなかで、人間と動物、人工と自然の間を縫うように行き来しながら、人とともに暮らすようになりました。完全に飼い慣らされることなく、野生を保ったままのねこの生活には、多様な回路が潜んでいます。隙間や内と外の領域を自在に行き来し、自分の身体で触れ、嗅ぎ、見て世界を把握するねこは、人間の身体感覚に基づく枠組みや社会の規範から逸脱する視点をもたらします。そして、自由、野生、ユーモア、ナンセンスを日常に挟み込み、人間の優しさと残酷さを照らし出しながら、瞬間に充足するあるがままの姿を見せてくれます。

6人の美術作家と1組の建築家が参加する本展では、ねこの表象ばかりでなく、日常の当たり前を問うことのなかに、身近なものへの愛着や社会のなかで見過ごされているものの存在が浮かび上がります。ねここと人間の関係は、他者に依存しつつ、互いが独立して過ごす社会の可能性を示すでしょう。また、異種の存在として時折見知らぬ顔を覗かせるねこは、言葉を越えた交感や、わかりあえる／あえない領域を明らかにし、また異世界への導き手にもなります。それぞれの作家と建築家の作品は、展示室だけでなく、天井や通路、お茶室にも一度でなく何度か登場し、空間を伸縮させたり反転させたりしながら、固定化した価値観から流動的に抜け出す様々な道を示します。

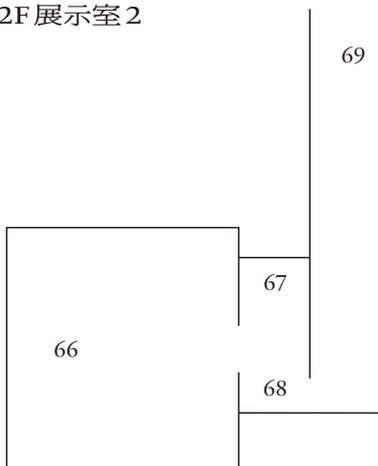
企画展示室 (展示室8)



2F 展示室1、アトリウム



2F 展示室2



茶室
70

レストラン
71

— 1F 企画展示室 (展示室8)

1. 落合多武《CAT Carving (猫彫刻)》2007年
吉野誠一氏蔵
2. 佐々木健《ねこ》2017年 / Serra Pradhan 氏蔵
3. 佐々木健《タオル (オレンジ)》2018年 / 大石一義氏蔵
4. 佐々木健《バスマット》2018年 / 作家蔵
5. 佐々木健《バスタオル (赤)》2019年 / 作家蔵
6. 佐々木健《タオル (青)》2018年
Rosen Family Collection
7. 佐々木健《ぞうきん # 絵画教室》2015年 / 作家蔵
8. 佐々木健《ぞうきん # 灰色》2015年 / 作家蔵
9. 佐々木健《ぞうきん # ピンクの線》2015年 / 作家蔵
10. 佐々木健《ぞうきん》2015年 / 作家蔵
11. 佐々木健《ぞうきん》2015年 / 作家蔵
12. 佐々木健《ぞうきん》2015年 / 作家蔵
13. 佐々木健《ぞうきん》2015年 / 作家蔵
14. 佐々木健《椅子としての自画像》1996-2021年
五味家 (The Kamakura Project) 蔵
15. 佐々木健《ふきん》2020年
五味家 (The Kamakura Project) 蔵
16. 佐々木健《のれん》2018年
五味家 (The Kamakura Project) 蔵
17. 佐々木健《テーブルクロス (祖母と母と2人の叔母)》
2019年 / 五味家 (The Kamakura Project) 蔵
18. 佐々木健《実家のテーブルクロス》2019年
大田秀則蔵
19. 佐々木健《ぞうきん # 黒》2015年 / 作家蔵
20. 中山英之+砂山太一《きのいしの家の建築模型》
2023年
21. 泉太郎《霧》2022年
22. 大田黒衣美《springlet》2023年 / 作家蔵
23. 大田黒衣美《ノアの盃》2023年 / 作家蔵
24. 大田黒衣美《狐が叫んだ》2023年 / 作家蔵
25. 大田黒衣美《旅する猫笛小僧》2013年 / 澤登丈夫蔵
26. 大田黒衣美《自分の影を探したかとその影で休む鶏》
2022年 / 酒井真樹・理紗蔵
27. 大田黒衣美《reading》2022年 / 作家蔵
28. 大田黒衣美《カプトガニ》2022年 / 作家蔵
29. 大田黒衣美《止まり木》2022年 / 作家蔵
30. 大田黒衣美《cold water》2022年 / 作家蔵
31. 大田黒衣美《trimming》2022年 / 作家蔵
32. 大田黒衣美《an encounter》2022年 / 作家蔵
33. 大田黒衣美《suncatcher》2022年 / 作家蔵
34. 岸本清子《I am 空飛ぶ赤猫だあ!》1981年
宮城県美術館蔵
35. 岸本清子《空飛ぶ猫 3 (未来の芸術)》1981年
宮城県美術館蔵
36. 岸本清子《空飛ぶ猫 2 (未来の科学)》1981年
宮城県美術館蔵
37. 岸本清子《空飛ぶ猫 1 (未来の宗教)》1981年
宮城県美術館蔵
38. 岸本清子《空飛ぶ猫 6 (過去の芸術)》1981年
宮城県美術館蔵
39. 岸本清子《空飛ぶ猫 5 (過去の科学)》1981年

宮城県美術館蔵

40. 岸本清子《空飛ぶ猫 4 (過去の宗教)》1981年
宮城県美術館蔵
- 41-45.
岸本清子《[アリス]》1980年頃 / 名古屋市美術館蔵
*前期・後期(4/4から)で同じ版画シリーズの展示替えがあります
46. 岸本清子 / 前期: 《[骰子の自画像]》1988年
後期(4/4から): 《[足の自画像]》1988年 / 名古屋市美術館蔵
47. 岸本清子 / 前期: 《[赤猫の自画像]》1988年
後期(4/4から): 《[ナルシスの自画像]》1988年
名古屋市美術館蔵
48. 岸本清子《政見放送》1983年 / 愛知県美術館蔵
49. 泉太郎《クイーン・メイヴのシステムキッチン
(チャクモールにオムファロスを捧げる)》2023年
50. 落合多武《大きいテーブル (丘)》2023年
51. 佐々木健《マスク》2020年
五味家 (The Kamakura Project) 蔵
52. 佐々木健《プラスチック・フィルム》2011年 / 作家蔵
53. 佐々木健《石》2017年 / 作家蔵
54. 佐々木健《ねこ (しいたけ)》2023年 / 作家蔵
55. 佐々木健《ブラックホール # サムホール》2019年
坂本匡史氏蔵

— 展示室 1

56. 佐々木健《防災シート # 白》2023年 / 作家蔵
57. 佐々木健《ブルーシート》2019年 / 作家蔵
58. 五月女哲平《black, white and others》2023年
作家蔵
59. 大田黒衣美《sun bath》2023年 / 作家蔵
60. 大田黒衣美《sun bath》2020年 / 作家蔵
61. 中山英之+砂山太一《きのいしの家具》2023年
62. 中山英之+砂山太一《きのいし かみのいし》
2019/2017年
63. 中山英之+砂山太一《ぬのいし》2023年

— アトリウム

64. 大田黒衣美《sun bath》2023年 / 作家蔵

— アトリウム階段下

65. 泉太郎《猫》2006年

— 展示室 2

66. 五月女哲平《horizon》2023年 / 作家蔵
67. 五月女哲平《sunset town》2022年 / 作家蔵
68. 五月女哲平《日が沈む前に》2021年 / 作家蔵
69. 五月女哲平《あなたに贈る》2023年 / 作家蔵

— 茶室

70. 五月女哲平《2つの太陽 #1 #2》2023年 / 作家蔵

— レストラン

71. 五月女哲平《彼ら彼女のための習作》2023年 / 作家蔵

佐々木健 (1976年生まれ。東京拠点。)

佐々木健は、ぞうきん (No.7-13) やタオル (No.3, 6)、ブルーシート (No. 57) などの身の回りの物を、油絵具で丹念に描き出す画家です。通常、絵画の主題にならなそうな身の回りの物は、佐々木の身体を介して時間をかけて描かれることで、改めて目を向ける対象になります。母が刺繍を施したふきん (No.15) やテーブルクロス (No.17, 18) は、女性が担ってきた家事に寄り添うように、糸の盛り上がりや布の凹凸も丹念に描かれています。《ねこ》(No.2) は、かつて作家がどうしても飼うことのできなかつた子猫を、絵画に留めたものです。美術館のような人工空間にぼつんと座る子猫は、守るべき対象と個人や社会との関係を照らします。そのようにして、佐々木は身の回りの目を向けられることのない存在を、絵画によって見えるようにしていくのです。

中山英之 (1972年生まれ。東京拠点。)

砂山太一 (1980年生まれ。東京、京都拠点。)

小石から巨石、果ては星まで、石には大小様々なスケールとそれに付随する意味や象徴性があります。建築家の中山英之+砂山太一は、小石を拡大して紙や布、木による石を作り、それを置く空間のスケールを伸縮して想像力を遊ばせます。《きのいしの家の建築模型》(No.20) は、建築基準法では実現できない天然石の柱に代わって、2.7メートルの木製の石を支柱にした建築模型です。

そして、《きのいし》(No.61) は木、《かみのいし》(No.62) は紙、《ぬのいし》(No.63) は布でできた、同じく小石をモデルに作られた家具です。《きのいし》に腰をかけて休み、《かみのいし》に触れ、《ぬのいし》に潜って石になってみてください。

道端の石と宇宙や禅の公安を象徴する日本庭園の石、そして信仰の対象になった古代の巨岩の差は、見方によればスケールの違いです。量塊があるようでない異素材による石を置くと、空間に新鮮かつ意外な異化作用が生まれます。

泉太郎 (1976年生まれ。東京拠点。)

《霧》(No.21)

球に入ったねこが勢よく回転しながら月曜日の美術館に出かけていく様子が、湾曲したスクリーンに映し出されています。しかし月曜日は多くの美術館が休みなので、ねこはエントランスに向かってボーリングのようにアプローチするものの、ガターを繰り返します。モデルとなったねこのキャラクターには月曜日を忌避しているという設定があり、机の下ではそのキャラクターの目が象形文字のようにデザインされた映像が投影されています。パソコンのキーボードを模したモニターには貝殻が映し出されており、月のように満ち欠けしています。美術館にとっての開館と閉館、貝の体とそれを覆う殻、そして眼球と瞳孔は、見える部分と見えない部分で成り立っているということで共通し

ています。それらから「目」と「月」と「貝」の漢字を連想した作家は、その三つの元になった象形文字まで遡り、思考を巡らせました。現在では似通った形状を持つそれらの漢字も、元々は別のものの形を元に作られているため、象形文字としては全く似ていません。ここでは、時代を追うごとに抽象化され、元の意味合いが曖昧になることで混ざり合うものどうしが並列されています。

《クイーン・メイブのシステムキッチン(チャクモールにオムファロスを捧げる)》(No.49)

ある一つの展覧会を貫くものが、なんとか隘路を流れる気配だとしたら。

気配とは何なのか? 気配を料理のための素材として考えてみる、システムキッチンからシンク、気配の素材としての衣類、衣装箱からヘリオガバルスの死に様と神殿、木曜日創造説におけるねこ支配の世界からイヴ&アダムのヘソ(ビス穴を残して巨大な絵は去った)への疑義、月の満ち欠けとチェシャねこ、欠けた前歯からNASAによるダート作戦へと、隘路の旅は続き、ずっと周りに回っている。

—泉太郎

昔から狂気と結び付けられる月の満ち欠け、もしくは『不思議の国のアリス』に登場するチェシャねこの笑いが頭上に浮かぶ展示室は、あらゆるものがあべこべになる世界。そこは、人間がねこの奴隷となる国の創造主クイーン・メイブが、展覧会全体の気配を再料理したキッチンなのでしょうか。壁の中には参加作家から借りた衣服などが埋められており、壁に取り付けられた蛇口から放出される気配の要素らしきものが天井に登る過程で精製されて真なる気配を導き出そうとしています。展示室中央には、掃除用具室に眠っていた古いポリッシャーが掲げられた塔が建っており、普段美術館で目に触れることのない清掃用具が、清掃員以外立ち入り禁止の祭壇のような空間に並べられています。清掃員は毎日そこから掃除用具を取り出し、壁にかかった絵を任意の場所に置き、それに覆い隠された床の部分は掃除をしません。

観客は、終了したゲルハルト・リヒター展で絵画が吊られていたビス穴に粘土を押し付けて、小さいへそ状の突起(オムファロス)を手にし、祭壇の前にあるチャクモール(メソアメリカの生贄を捧げるための人体像)型台座に捧げることができます。いつもは展覧会終了後に補修される凹が凸になり、美術館における清掃は不可思議な儀式となるなど、美術館の機能が様々な事象に交換され、反転を繰り返します。古代の神殿から現代の美術館まで、知性を持つ人間の存在証明とされる文明が、そこに潜む残酷さとともにひっくり返って、意味と無意味がせめぎ合った末に真空が生まれます。

(作家のメモから)

バビロンの貧乏クジ/真洞穴性/太陽神話

ヘリオガバルス/衣装箱/ヘリオガバリウム/クローカ・マキシマ/リヒターの凹→凸/湯きの海/チェシャ猫の笑い/三日月/前歯が穴(僕の前歯は欠けている。これは子供時代の合戦で負

った戦傷だ。飛んで来た雪玉の中には石が仕込まれていて、気付いた時には目の前の雪が真っ赤に染まっていた…などという鮮烈鮮明な記憶はないが、20歳の頃、補修してあった前歯は餡パンを食べていた時に再び欠けた) / Dart作戦 (NASAには地球防衛のためのチームがある。彼らが警戒しているのは、地球に小惑星が衝突すること。そして近年、地球近傍天体「ディモス」を周回する衛星「ディモフォス」に宇宙船を意図的に衝突させて軌道を変えさせる実験 (Dart作戦) を実行、成功させた) / スラングとしての Dart / 黒い隕石 / 真実の口 / 嘘の口 / マルティン・キッペンベルガー “When It Starts Dripping From the Ceiling” / 清掃により作品が変化して→ヨーゼフ・ボイス、グスタフ・メッツガー / ヨガ / チャクモール / オムファロス→臍 / 木曜日創造説 / フィリップ・ヘンリー・ゴスが提唱した“オムファロス”。オムファロスとはギリシャ語でヘソの意味。もしアダムとイヴにヘソが存在した場合、人間から人間が産まれたことの証明となってしまう。つまり世界の創造主たる神の御業であるはずの人間の創造の過程が崩れてしまう。そこでゴスが考えたのは、世界は最初からある程度成長した、「途中」の段階で生み出されたという説です。アダムとイヴにヘソがあり、血液が流れているのならば、その血液を作るための養分や排泄物も体内にあるはず、そして神は、ヘソも血液も腸も排泄物も、さらには地層や化石も同時に創造したのだ、という話。バートランド・ラッセルによる“世界五分前仮説”は、“オムファロス”に影響を受けており、“世界五分前仮説”のパロディである木曜日創造説 (世界は木曜日に生成され、それより前の記憶が捏造されている、という話) の世界観では、人が猫を甲斐甲斐しくお世話するのは、そもそも人間が猫にとっての奴隷種族であるからだという。

《猫》(No.65)

「数える」行為には、対象をどのような距離、基準、範囲で見ているかが反映されます。たとえば山を一つと数えるとき、木や葉、枝は数えていないことになります。様々なものを同列に数えることは、すべて等し並にすること、またはそこから零れ落ちるものを無視することでもあり、そこに「酷さ」や「不気味さ」も含まれてくるでしょう。この作品の主人公「ねこ」は、人と空き缶を同じように「一つ」と数えていきます。

大田黒衣美 (1980年生まれ。愛知拠点。)

大田黒衣美は、自在な素材を用いて、見立てに似た手法により飄々とした光景を生み出します。自然環境のなかで擬態の役割を果たすウズラの卵模様を用いて風景画を作り (No.22-25)、板の木目を活かして独自の物語を秘めた絵画を描き (No.26-32)、そして身体に触れた後すぐに捨てられるポケットティッシュの表面に独自の物語や日々の一瞬の光景を留めます (No.33)。巨大な写真作品《sun bath》(No.59) は、アトリエに遊びに来て無防備に眠る野良ねこのうえに、ガムで象った人を置いて撮影したものです。リラックスするときに噛むガムで作られた、ねこの毛皮の草原で休む人のいる光景には、いくつもの寛ぎが重ねられています。自然光の降り注ぐ通路の壁には、公園で憩うガムでできた人々が点在しており、言語による常設作品が置かれた吹き抜けに、ゆるやかな空気感を与えています (No.64)。

岸本清子 (1939年生まれ。東京、愛知拠点。1988年没)

岸本清子にとって、完全に飼いやられることのないねこは、愛と自由の象徴であり、人間の管理欲望を乱す自らの化身でした。岸本によれば、絵画空間は過去と未来がせめぎ合う現在であり、その情熱的で幻想的な絵は、現代文明を批判し、来たるべき理想世界を称揚しようとするものでした。《I am 空飛ぶ赤猫だあ!》(No.34) は、赤・ピンク・白のねこがそれぞれ未来の芸術・科学・宗教を、緑・青・黒のねこがそれぞれ過去の芸術・科学・宗教を表しており、未来のねこたちが旧態然とした過去のねこたちと戦っています。また岸本は、作品制作だけでなく、人々の苦しみを肩代わりする「地獄の死者」を名乗り、名古屋の街中で様々なパフォーマンスを展開しました。岸本はその活動のすべてに全エネルギーを注ぎ、不均衡な権力構造や男性中心主義に異議を唱えて、芸術を介した社会の変革を目指したのです。

落合多武 (1967年生まれ。ニューヨーク拠点。)

展示の冒頭、キーボードのうえで優雅な無気力さを湛えて横たわるねこ (No.1) が奏でる音が、展覧会へと導きます。展示室の奥には大きなテーブル (No.50) があり、そのうえにはドローイング、彫刻、オブジェ、日用品などが並び、それぞれがそれぞれでありながら全体として有機的に繋がる、丘のような場ができています。テーブルのうえの白と黄色のまだら模様、しっぽ、色が塗られたブラシなどは、気まぐれな脱領域的存在そのもののねこが往来したような自由な連想遊びを誘い、言葉や意味からすり抜ける軽妙な空気感を生み出します。

五月女哲平 (1980年生まれ。東京、栃木拠点。)

柔らかい黒と白の短冊状のパネルが、広い壁面に一定のリズムを持って並んでいます (No.58)。その絵画を時間のなかで眺めると、画面の下に何層も塗り重ねられた色彩が浮かんで来て、画面に微かな揺れが生じます。一見シンプルなその絵画は、画面に空いた穴が落とす微かな影を含めて、絵画面のみでなくその狭間や空間に微かに作用します。《horizon》(No.66) は、誰しもが眺めたことのある地平線や水平線などの、空と大地 / 海を二分する線が円で描かれており、普遍的かつ抽象的なもの同士が融合しています。そして時間が進むにつれ闇が深くなるように、地の青が濃くなって画面を覆っていきます。それはさらに現実空間と繋がって、通路の壁も絵画空間にし、その先には祖父が自身の誕生の際に贈ったという風景画と似た眺めの海の写真が掛かっています。同じく画家であった祖父との絵画と海を介した重なりは、絵画の下に重ねられた色層のごとく、長い時間と空間のなかでの芸術と人の暮らしを、分かつことなく繋げます。

ねこのほそ道
Cat's Narrow Road

豊田市美術館
2023年2月25日(土)—5月21日(日)